

【目的】平安文学には盛大な饗宴の場面がしばしばみられるが、それらの食膳には何が供せられていたのか。本研究では『源氏物語』にみられる「食」について食品の種類、調理、供食、食べ方、歌への詠み込みなどが、どのような意味合いを含んでいるのかを考察した。

【方法】平安朝の「食」を食物関係の古文書『和名抄』『類聚雑要抄』『延喜式』や他の文学作品『宇津保物語』『枕草子』『今昔物語』等から「食事の回数・時刻・献立」「調理法」を分析し、食品は「飯・粥・餅」「魚肉類」「野菜類」「菓子・果物類」「調味料」「飲物」に分類し、通覧した。その上で、『源氏物語』の「食」について考察した。

【結果】平安の貴族食は形式化し、『源氏物語』をはじめ、平安文学のどれを見ても、食品の味覚や食事の快楽を述べたものはほとんどない。また、『源氏物語』の内容は「もののあはれ」であり、食べ物の登場する場面はそれほど多くはない。しかし、物語の展開の中の重要な場面になると、その場にふさわしい食べ物が登場して状況の描写を盛り上げる。本研究で分類した食品の中でも「野菜類」に、その特徴が顕著にみられ、16品、63回見出された。巻名もその多くが巻中の歌から採られているように、登場する食べ物もまた、そのほとんどが歌に詠み込まれることによって、この物語に大きな役割を果たしていることが伺えた。物語の中での前後の状況を踏まえると、現われる食べ物の種類についても、その扱い方についても、歌への詠み込みについても、さまざまな意味を担っており、『源氏物語』の中の「食」はその人間の精神のかたち、存在のあり方をやどし、表象するものとなっていることが明らかになった。